

令和 3 年 5 月 7 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K04415

研究課題名（和文）WISC-IVを用いた治療的介入：親との協働モデルの構築及びマニュアルの開発

研究課題名（英文）Using WISC-IV as a therapeutic intervention: refining collaboration model with parents and developing a manual

研究代表者

隈元 みちる（KUMAMOTO, Michiru）

兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授

研究者番号：60379518

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：臨床心理士への質問紙調査を行い、臨床心理士が行っている発達検査・知能検査の実態について調査した。そのうえで、心理的介入の初期段階にアセスメントの一環として用いられることの多いWISC-IVのフィードバックを治療的なものとして位置づけなおし、親との協働モデルを提示した。さらに、このモデルを養成段階の人でも行えるようマニュアルとして編纂した。マニュアルおよび相互作用を含む講習会への参加によって、養成段階の人でもある程度協働的なフィードバックを習得することができることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

臨床心理士への質問紙調査によって、実際のクライアントを前にした検査施行の様子や、支援への活かされ方の実態の一端が明らかになった。これらは今後心理アセスメントの教育や実施のスタンダードのもととして活かされていこう。また調査結果でも多数の心理職が使用しているWISC-IVの協働的なフィードバックモデルおよび実施のためのマニュアルをまとめられたことは、より多くの心理職が心理アセスメントを協働的なものとして実施するための礎の一つとしての意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：We conducted a questionnaire survey that examined how psychologists conduct intelligence and mental development tests at their work place. Based on the result, a model of “collaborative WISC-IV feedback with parents” are presented, in that model we repositioned WISC-IV feedback as therapeutic intervention from one part of an assessment in the early stages of psychological intervention. Furthermore, we have compiled this model as a manual so that psychologist candidates can learn it. The manual in conjunction with an interactive training session and role-play help candidates learn collaborative WISC-IV feedback.

研究分野：臨床心理学

キーワード：WISC-IV 協働的アセスメント マニュアル

## 1. 研究開始当初の背景

日本では来談早期に診断や状態像の把握・介入方針の決定の目的で WISC-IV を実施することが多いが、これを治療的に用いた研究は報告されていない。WISC-IV のフィードバックによって、従来の介入方法では時間や意欲の制限により参加できなかった親を取り込めるほか、新たな負担を強いずにより多くの親への来談早期からの介入が可能となろう。

## 2. 研究の目的

本研究は、WISC-IV のフィードバックセッション自体を治療的なものとする新たなモデル (Collaborative WISC-IV Feedback with Parents:CFP) を提示し、広く心理職が使用できるような実効性のあるマニュアルの作成を行うことを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) WISC-IV の実施状況についての質問紙調査を行った。研究参加者：関西圏の臨床心理士 200 名。質問紙：対象者が知能検査・発達検査を施行する主な臨床現場 1 つを念頭に、無記名自記式で選択式 (経験年数、主に知能検査・発達検査を施行する臨床現場の領域、頻度、対象、目的、施行する検査名、テストバッテリーで使う検査名、情報収集の種類・情報源、本人・家族への検査結果の伝達方法、結果書面の内容・宛先、結果書面の利用者負担額、書面作成所要時間) および自由記述 (Q1「知能検査・発達検査を施行する際に重視するポイントをお教えてください」、Q2「知能検査・発達検査を施行する際にご苦労や醍醐味があればお教えてください」) の設問への回答を求めた。配布・回収方法：郵送による。実施期間：2018 年 2 月～2018 年 3 月。倫理的配慮：調査対象者には、書面にて、調査の趣旨、匿名による調査であること、回答は研究目的のみに使用することを明記し、同意する場合のみ質問紙に回答・返送するよう求めた。さらに、主著者所属大学の研究倫理審査委員会の承認を得た。分析：択一・多重設問は、それぞれの回答を計数し経験年数および領域との関連を分析した。自由記述回答については筆者ら臨床心理士 5 名で Q1、Q2 のそれぞれについて合議しながら下記の手順で KJ 法を行った。1) 回答をすべてデータ化し印刷する、2) 回答者ごとに切り離す、3) 同じ回答者でも意味内容が複数あるものは意味内容で切片化する、4) 意味内容が似たものを小グループに分ける、5) 小グループにカテゴリー名をつける、6) 意味内容の似た小グループをさらに大グループに分ける、7) 大グループにカテゴリー名をつける。

(2) 効果的なマニュアル作成のために、研究代表者は各国で協働的 / 治療的アセスメントを実施している研究者らと意見交換を行った。

(3) (1)(2) をもとにマニュアル試案を策定し、心理職の養成段階にある方へのマニュアル試案をもとにした講習会を実施した。研究参加者：臨床心理士養成コースに属する大学院生で、研究の趣旨に書面で同意の意思を示した 4 名。実施手順：参加者への事前アンケートの実施。マニュアル試案を伝える CFP 講習会の実施 (180 分)。マニュアル試案にもとづいて、参加者がペアになってそれぞれにロールプレイを実施 (各 50 分、ビデオ撮影)。講習会・マニュアル試案についての参加者への半構造化面接 (30 分、録音)。倫理的配慮：研究代表者および研究分担者の所属大学倫理審査委員会の承認を得た。同意書面には、個人情報保護されること、自由意思による参加であり撤回による不利益はないこと、学業成績に影響しないことが明記されていた。分析：インタビューを逐語におこし、発言内容ごとに切片化しラベルをつけた。それぞれのラベルから意味の似ているものを集めて小カテゴリーを作成し、さらに意味の似ている小カテゴリーを集めて大カテゴリーを作成した。作成された大カテゴリーの関連を概念図にまとめた。ロールプレイについても逐語におこし、研究代表者および研究分担者でそれらを見直し、手引き試案に沿っている部分、流れが停滞したり困惑したりする様子が見られる部分を抽出した。最後に、インタビューでの語りと、ロールプレイの様子を突き合わせ、研究者らからみる参加者の意識と実態のずれをまとめた。

## 4. 研究成果

(1) 本調査が明らかにした実態として、知能検査・発達検査の実施状況は、機関や個人によって大きく異なることが指摘できる。施行頻度は保健・医療領域が教育 / 福祉 / 大学・研究所領域よりも多い傾向にあるが、各領域内でもばらつきは大きいこと、テストバッテリーとして施行される検査も多岐にわたることが示された。また、自由記述の結果から、心理職らが知能検査・発達検査の 1) 事前準備、2) 心理検査の実施、3) 検査データの整理および分析、4) 検査結果のフィードバックの各段階において、様々な側面に目を配り、クライアントそれぞれについての「個別の意味」に迫ろうとする様子が確認された。このことは、日本の心理職達がそれぞれの現場で、いかにクライアントを支援し検査を役立つものにできるかに腐心し、その醍醐味を味わってまいることを示していると考えられた。(隈元他、2021)

(2) 日本における心理職向けの研修会や、European Center for Therapeutic Assessment での研修の機会を得て、Therapeutic/Collaborative Assessment についての知見や、その適用について議論を行った。European Center for Therapeutic Assessment では、クライアントが初めからある程度 T/CA あり

るいは心理検査そのものを求めてきていることが、T/CA を円滑に実施できている一つのポイントであることが指摘された。日本では T/CA の認知度が低いことから、自ら T/CA を求めてくるクライアントは非常に少ない現状があること、また心理検査(あるいは心理療法)そのものについても自ら求めるハードルが日本のほうが高いであろうことが確認された。この状況を踏まえ、日本ではまずは T/CA のエッセンスを取り入れていくことが有用ではないかと考えられた。また、アセスメントへの動機づけやコミットメントの強さの個別性や国による違いについて議論がなされた。

(3) マニュアル試案の講習会への参加者のインタビューから、マニュアルがあることで養成段階にある初学者でも協働的なフィードバックに取り組みやすくなることが示された。さらに、初学者たちに協働的なフィードバックのモデルを紹介しロールプレイを行ってもらうことは、協働的なフィードバックがクライアントの役に立つという手ごたえを得られ、自身の WISC-IV の学習不足を痛感させる効果があり、それによって心理臨床全般や協働的なフィードバックへの学習意欲を促進したといえる。一方で、初学者たちのロールプレイからは、フィードバックの構造の緩みややすさや親の言動と検査結果を結び付けることの困難が見られた。実際の使用にあたっては、初学者にはとくにロールプレイのスーパーヴィジョンが必要になると考えられた。これらを踏まえて、最終的に改良されたマニュアルを策定した。(稲月・隈元, 2020)

#### <引用文献>

稲月聡子・隈元みちる(2020)心理検査のフィードバックにおける「協働的」やり取りを初学者にいかにかえるか：親との協働的な WISC-IV の結果のフィードバック面接 Collaborative WISC-IV Feedback with Parents の講習会の実践から考える, 日本福祉大学心理臨床研究センター紀要, 15, 17-26.

隈元みちる・竹内直子・石田喜子・稲月聡子・岡尾裕美子(2021)知能検査・発達検査の施行状況の実態と心理職の感じる苦勞と醍醐味：関西圏の臨床心理士への質問紙調査から, 教育実践学論集, 22, 59-68.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 隈元みちる・竹内 直子・石田 喜子・稲月 聡子・岡尾 裕美子	4. 巻 22
2. 論文標題 知能検査・発達検査の施行状況の実態と心理職の感じる苦勞と醍醐味：関西圏の臨床心理士への質問紙調査から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育実践学論集	6. 最初と最後の頁 59-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 隈元みちる	4. 巻 56
2. 論文標題 参加者への質問紙調査からみる親との協動的WISC-IVフィードバックの親支援効果	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 兵庫教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 127-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 隈元 みちる	4. 巻 36(4)
2. 論文標題 保護者支援としての協動的WISC-IVのフィードバック	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 心理臨床学研究	6. 最初と最後の頁 377-386
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Kumamoto Michiru
2. 発表標題 Utility of collaborative WISC-IV feedback with parents for parental behavior
3. 学会等名 2nd International Collaborative/Therapeutic Assessment Conference（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	稲月 聡子  (INATSUKI Satoko)  (50839892)	日本福祉大学・その他部局等・准教授    (33918)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
イタリア	Universita Cattolica del Sacro Cuore		